# 町立移管が示した高校教育の地域主義的転回
## ――奥尻高校の実践から見える高校魅力化の意義――

青山学院大学　樋田　大二郎

キーワード　高校魅力化、地域学校協働、町立移管、地域学校協働、町立移管、よそもの・わかもの・ばかもの、アウラ、レリバンス、フロー、地域課題解決型学習

奥尻高校と奥尻島の実践から多くのことを考えさせられた。調査結果を踏まえて高校魅力化の論点を、地域主義的転回の視点からいくつかを紹介したい。

### 1　「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」

奥尻高校の町立移管は、町が統廃合の主導権を持ちたいという理由及び中学卒業生が島外に出る状況を改善したいという理由で町長が打ち出した方針だったという（『地域人材育成研究』第４号）。今回の訪問調査からは、町立移管は、概ね町長のねらいにかなった結果をもたらしていることが分かった。

しかし町立移管は町長のねらい以上の果実をもたらしていた。地域と高校の協働による、地域と高校の同時的で双方向的な活性化である。奥尻島では高校と地域は、〝「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現〟しつつある。

上記の〝〟でくくった文言は文科省のパンフレット「これからの学校と地域　コミュニティ・スクールと地域学校協働活動」（令和二年三月）で用いられるキャッチフレーズであるが、初代の俵谷俊彦校長は同パンフレット以前に地域学校協働の意義に気づき、まなびじま奥尻プロジェクトを開始していた。そして、奥尻高校は町立移管の初年度から町おこしワークショップを実施し、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現して、地域と学校のパートナーシップに基づく双方向の「連携・協働」を推進していった。

ここで、文科省が提唱する地域と学校の協働の歴史を振り返る。まず、文科省はチーム学校の取り組みやその前史の段階から、学校教育はもはや教師が教室にこもって教師王国を作ることは困難であることを考えていたことが分かる。チーム学校を論じた大橋によると一九九〇年代以降の段階では、〝学校内の問題〟を学校外の専門家との協力によって解決していこうとした（大橋二〇一七）。二〇一〇年代以降には子どもの〝学校外での問題〟を学校外の力を借りて解決しようとした。そして、近年の「開かれた学校論」では子どもへの教育全体を充実させるという視点からのチーム学校論を唱えるようになった。

奥尻高校の実践と時を同じくして、文科省はチーム学校からさらに一歩進み、地域と高校の双方向的な協働を提唱した。平成二七年に中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（中教審一八六号）」（平成二七年一二月二一日）で、地域全体で未来を担う子どもの成長を支える「地域学校協働活動」を推進することとした（「地域学校協働本部」）。

翌、平成二八年には中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第一九七号）」（平成二八年一二月二一日）において、社会の変化に目を向け、社会の変化を柔軟に受け止めていく「社会に開かれた教育課程」を提唱した。

続いて平成二九年三月に、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」及び「社会教育法」が改正された。前者では教育委員会に対する学校運営協議会の設置の努力義務、学校運営協議会の委員に「地域学校協働活動推進員」を加える仕組みを構築した。後者では教育委員会が「地域学校協働活動」の地域住民等と学校の連携協力体制の整備を行うことおよび「地域学校協働活動推進員」に関する規定の整備を行うこととされた。

そして令和元年度（二〇一九年度）からは、いよいよ事業として「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を開始した。

以上、駆け足で文科省の動向を見てきたが、チーム学校では地域と学校の関係は学校が地域に対して校内の問題のある児童・生徒への支援を求める段階から、学校が校外の問題のある児童・生徒への支援を求める段階へ、さらには学校が校外の普通の児童・生徒への支援を求める段階へと至った。そして、近年では、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現して、地域と学校のパートナーシップに基づく双方向の「連携・協働」を実現しようとしている。

## 2　チーム学校を超えたチーム町
### ――生徒と地域にとっての最適解――

奥尻高校と奥尻町の地域学校協働は文科省からの外的要請に合わせたものではなく、『地域人材育成研究』第三号の報告の①②③④にあるように、奥尻島の中で内発的で必然的に発展した協働である。

初代の俵谷俊彦校長や井上壮紀教頭は町立移管を準備する中で悩んだ末に、生徒の学びに焦点づけられたチーム学校の発想にとどまることなく、島と高校を双方向的に発展させて行くという発想にいたり、

言わばチーム町としてのまなび島プロジェクトを行うに至った。文科省が提唱する仕組み（例えば地域学校協働本部や地域学校協働支援員）を設置しないまま、あるいは県の指示で行うわけでもなく、町内の様々な関係者や町の職員となった教員の想いや工夫で町の生徒と町のニーズに応えた結果である。

おそらく、われわれがこうした奥尻高校の取り組みを賞賛すべきものとして公表すると、政府が財政的、制度的に保障せずに関係者に対して政府の身代わりを強制することを援護するけしからん意見だ、という批判が返ってくることになると思う。

そうした批判は場合によっては正しいだけに、やっかいな批判である。しかし、少なくない場合では、高校魅力化は脱中央依存化、自立分散型化、持続可能な社会化の大きな社会変動を直視し闘う人たちの取り組みであり。安易な政府批判で、多様で、地域に根ざした内発的活性化の芽を摘むことは厳に慎まなければならない。

制度の網の目に囚われ、制度に依存しなければならない状況の中では政府を責めることが正義でありうる。政府の怠慢を指摘することには意義がありうる。しかし、奥尻町は地域の個性が明確であり、共同体の力で大災害を乗り越えた実績がある地域であり、自分の町の高校生の教育を自分たちのコントロール下に置くことに成功した地域であり、教員集団がいわゆる「よそもの・わかもの・ばかもの」の資質を十分に持っており、文科省に依存することなく町立高校として教育に責任を持つ。奥尻高校の場合は地域の力で地域の町立高校を育てて活用することが非難されなければならない理由は見当たらない。奥尻島

では文科省の指示と支援を待たないことが地域にとっても、生徒にとっても、教員にとっても最適な選択である。

なお、地方政府と中央政府のレベルでは、支援はするが指示はしないという教育動向が見て取れる。例えば島根県の高校魅力化では、県は魅力化の主幹の配置その他の人的財政的支援を行い、加えて、教員やコーディネーターの相互研修・情報交換、われわれのような研究者の受け入れによる外部視点の取り入れは行う。しかし画一的や外発的な改革の押しつけはしない。地域と高校の状況に応じた多様で内発的な活性化を支援する結果となっている。文科省も前述の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」や「地域学校協働活動」などの自主的な改革の支援を行っている。

繰り返しになるが、奥尻高校の事例は、県や文科省の資金やアイデアの提供を待たずに、地域と高校が協働して、内発的で地域の状況に合わせた、多様な高校魅力化を行っている事例である。

## 3　高校魅力化の魅力の感覚

奥尻高校の取り組みから、わくわく感やドキドキ感が感じられた。また、生徒は目の前にある課題に対して高校生感覚で没入していた。そして、生徒だけでなく教師や地域住民でも同じようなことが起きていた。

今日の日本の高校は魅力を欠くことが少なくない。われわれの島根県での調査結果では、島根県の高校魅力化原参加校八校の魅力化スタートの直接のきっかけには、統廃合の危機回避であったり（隠岐島前高校）、キャリア教育の不振への対策であったり（横田高校、吉賀高校）、生徒の不適応対策であったり（飯南高校）の要素が見られた。これらの高校では一部の生徒を除いて、従来の教科書中心や受験学力中心の教育からは高校生活のわくわく感やドキドキ感、適切感、没入感が得られなくなっていた。つまり、高校生活にこのあと論ずるような魅力が無くなっていたのである。

魅力化を始める前の高校での勉強は将来の地位達成のための忍耐であり、やらされ仕事であり、詰め込みであった。生徒は「欲望の即時充足」は劣った欲望であると教えられ、忍耐と勤勉の彼方で味わえるかもしれない「延期された欲望の充足」こそが正しい欲望であると教えられた。

しかし中山間地域という条件不利地域においては、延期された欲望の充足を求められた生徒のうち、少なくない割合が学校教育を介しての地位達成を断念するか、そもそも中卒時に地元を出て地位達成等の条件有利な都市部の高校へ進学した。その結果が離島・中山間地域の高校生の中退や不登校であったり、地元中学卒業生の地域外の高校への流出が目立つようになった。

わくわく感やドキドキ感、適切感、没入感とはどのような感覚だろうか。このあと、アウラとレリバンスとフローという三つの難解な概念を使うことを許していただき、教育の魅力を考えたい。魅力化以前の従来型の高校教育は、アウラ（オーラ＝いまここ的性質）が欠如していたり、実生活とのレリバンスを喪失していたり、フローの感覚を欠いていたりして、高校教育に魅力を感じることが出来なかった。

アウラの欠如とはものごとからオリジナルであることやライブあることが欠如することである。アウラはヴァルター・ベンヤミンが『複製技術時代の芸術』の中で唱えた概念であり、アウラの欠如は例えるならば、過去に行われたすでに経過や結果を知っているスポーツの録画を見ている時の感覚である。あるいは、ツアーで社寺を訪問して宗教的な感覚が湧き上がることを犠牲にしてでも、ガイドブック通りの事物が存在することの確認を強いられる感覚である。

レリバンスの喪失とは、実生活との適切な関連の感覚（又は教材の現実生活との適切な関連）が失われることである。本稿ではアメリカの経験主義教育の教育学者デューイが『学校と社会・子どもとカリキュラム』の中で検討したレリバンスの意味で用いている。デューイによるとレリバンスの喪失は学びの動機付けを損なうものである。

フローは没入感のことである。ハンガリー生まれでアメリカで心理学の研究を行ったチクセントミハイによると、「心理的エネルギー」が今取り組んでいる対象へ一〇〇％注がれている状態をいう。

奥尻高校では高校魅力化の取り組みの中で、高校教育にアウラやレリバンス、フローが豊潤となり生徒はわくわく感、ドキドキ感、内発的動機付けが高まっている。また、奥尻高校以外の魅力化でも同じ傾向があり、『地域人材育成研究』第１号、第２号で取材した愛媛県の魅力化を行っている高校でもおなじことがみられた（樋田有一郎二〇二〇ａ）。

## ４　高校魅力化とは

高校魅力化は将来の地位獲得のための手段的な高校生活や学歴主義

的高校生活（延期された欲望の充足を良しとする高校生活）ではなく、前述のようなわくわく感、ドキドキ感、適切感、没入感がある高校生活を作り出そうとしている。

また、高校魅力化の地域学校協働の定番となっている地域課題解決型学習では、生徒は上述の魅力を感じるだけでなく、有名大学入学や大会社への就職を目指すことの多い出口指導にとどまらないトータルコーディネートのキャリア教育をうけている（『本号』の②報告）。

高校魅力化の背景や目的については、地域人材育成研究会の蓄積の中から、次の二点を挙げておきたい。

第一に、比較的多くの高校で見られるのは募集対策である。地方では多くの高校が定員割れしており統廃合の危機に直面している。定員割れしている高校は、前述のように従来型の進学実績や部活動実績を高める競争を行うための条件が不利な場合が多く（条件不利校）、都市部の伝統校や私立校に遅れを取りがちである。条件不利という現実を受け入れずに進学実績や部活動実績を無理矢理高めようとすることは、中退や不登校など生徒の高校生活への不適応を招く結果となりがちである。従来型の募集対策の覇道を問い直して、その上で今、生徒と社会から求められる高校教育を構築していくことが募集対策の王道であり、高校魅力化の第一の目的・背景である。

第二は目的についてである日本社会と地域社会の地域人材育成の要請に応えることである。産業と社会の地方分散化・自立分散型化、地方創生、持続可能な社会の将来の担い手の育成、あるいは今現在そうした貢献をしている地域住民やし始めようとしている地域住民との双方向的協働の若きパートナーの育成が目的となっている。なお、将来の担い手というとき、かつては、行政が工場誘致などの雇用をつくる努力をして、若い世代はそこでの就労を前提に地元に帰って来るというパターンがあった。

しかし、『地域人材育成研究』第四号で、地元住民が語っているように、これからは若者はいったんは町外に出て成長して、a．地域に戻り住んでよそ者の視点や技能を持ち、さらに外部とのネットワークを持つ者（＝地域内よそ者）（樋田大二郎 二〇一五：樋田有一郎 二〇二〇 b）、b．他地域に住んだとしても、地元とのつながりを持ち知識・技能やネットワークを提供する者（関係人口）、c．Iターン者やさまよい人を受け入れ根付かせる者（よそ者使い）となることが、奥尻町や日本中の離島中山間地域が望む地域人材である。

## 5　奥尻高校という希望
### ――自然な想いの発露の場――

われわれは、奥尻高校を知ることで、わくわく、ドキドキする。それは奥尻高校に魅力があるからだけではない。今、日本中で高校を良くしたいとか地域を良くしたいという想いが渦巻いているからである。しかし、どんなに渦が激しく巨大なものになっていても、地域と高校についての常識に囚われていると、そのエネルギーが改革の力に転換できないでいる。奥尻高校にはわれわれの常識を打ち砕く柔軟さや自由さがある。

奥尻高校の取り組みは、日本の地域と高校を変革する理想のための

取り組みではない。地域の事情や高校の事情に基づいた内発的な取り組みである。しかし、町立移管という工夫は良い意味でパンドラの箱を開けた。

子どもは地域の希望、家族の希望である。われわれはインタビュー以外の場面でも町民と話す機会があった。インタビュー対象者も町民も高校を町立移管することで、子どもが町の希望であることを再確認した。町立移管の結果、生徒や教師、町民の熱い想いやドキドキ感が解放された。われわれは、奥尻高校を見ることで、町民や保護者、そして生徒自身が高校教育に熱く関われる世界を見ることができた。

『地域人材育成研究』第3号は、奥尻高校の校長、教員、生徒の声をアーカイブした。近刊の『地域人材育成研究』第4号は、奥尻町の行政、組織、卒業生の声を紹介する。

〈引用・参考文献〉

ジョン・デューイ、一九九八、市村尚久（翻訳）『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社。
長谷正人、二〇一九、「複製技術時代における思考の可能性――ベンヤミンの複製芸術論を読み直す――」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六四巻、八〇五－八二〇頁。
樋田大二郎、二〇一五、「離島・中山間地域の高校の地域人材育成と「地域内よそ者」：島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の事例から『教育研究：青山学院大学教育学会紀要』（五九）一四九－一六二頁。
樋田有一郎、二〇二〇、a「高校魅力化における「地域の特色を生かした教育」のあり方を考える――学習目標と学習効果の整合性に着目して――」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』（二七－二）五一－六三頁。
樋田有一郎、二〇二〇、b「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性――島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して――」『村落社会研究ジャーナル』二六（二）一－一二頁。
文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」【地域魅力化型】
大橋隆広、二〇一七、「チーム学校」論の系譜：一九九〇年代以降の学校論を中心にして『広島女学院大学人間生活学部紀』第四号八一－八六頁。